

相国寺御用達

京銘菓

雲龍

雲龍は相国寺に保存されている狩野洞春の龍画に感銘を受け創作した、京菓匠・俵屋吉富の代表的な名菓です。雲龍の奥深い旨さの秘密、それは精選された材料と、一本一本心をこめて巻いていく手づくりの味にあります。心をこめた贈り物に幸福を呼ぶ雲龍をどうぞ……。



京菓子司

俵屋吉富

本店
電話
京都・室町上立売
2211代

圓明

平成二十三年 正月号 (第九十五号)

晴
夕暮月懸
清光落千江
懸岸涼夜月
孤風更浪麦
點々生九霜



大本山 相国寺
相国会本部



平成二十三年 辛卯

◆表紙写真 重要文化財「洞窟達磨図」無象静照賛 鎌倉(鹿苑寺蔵)

黙々坐九霜 孤風更没雙 熊峯涼夜月 清影落千江 無象静照拜賛

菩提達磨は禅宗の初祖。六世紀に印度より中国に禅を伝える。本図は達磨が崇山少林寺で九年間面壁坐禅した、という故事が題材。朱の衣を着た達磨は古来よりよく描かれる。朱(緋色)が最高位の僧侶がまとう色とされたところからとも、少林寺で坐禅していたとき着ていた衣が朱であった、とも言われる。鮮やかな彩色で描かれた衣と、墨の濃淡のみでの洞窟や松が対照的。まるで目の前で坐しているように表されている。賛の無象静照(一一三四～一一〇八)は鎌倉時代の禅僧。入宋し径山の石溪心月に参じ印可を受く。また育王山の虚堂智愚の門にも入り参究。帰朝のおり虚堂より与えられた墨蹟「国宝・破れ虚堂」が著名。実に虚堂の書になるこれと同じ偈が鹿苑寺にも伝えられている。帰国後、筑前博多(福岡県)聖福寺、鎌倉浄智寺等五山十刹に昇住する。

表紙作品解説／承天閣美術館事務局長 鈴木景雲



歳旦祝語

管長 大龍窟 有馬頼底

平成二十三年 辛卯年

歳旦

聯芳祖苑太平の時

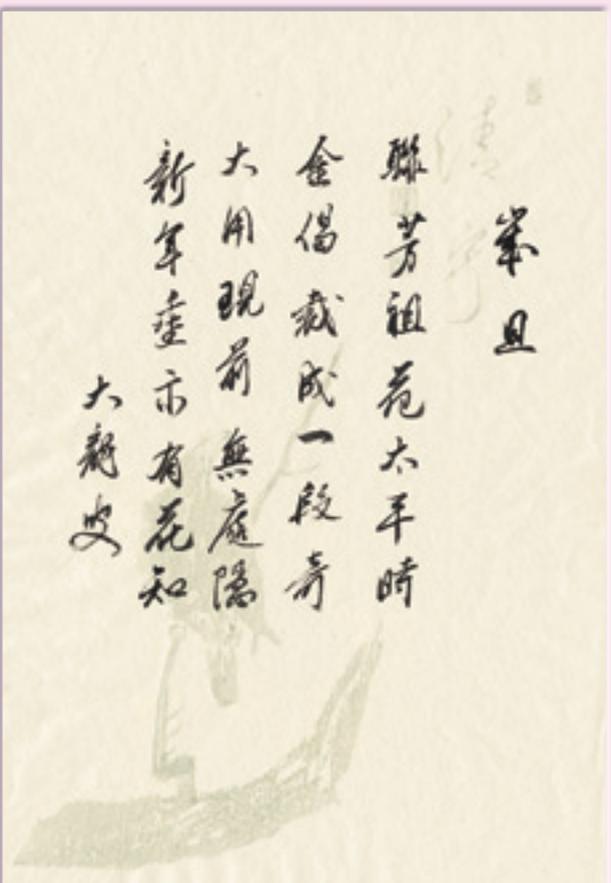
金偈裁成一段と奇なり

大用現前隠る處無く

新年の垂示は花の知る有り

大龍叟

永遠につらなる大本山は太平の時をむかえ御目出たい偈となり、ひときわである。行動をおこすところ、かくるところなくあらたな年のコメントは花のみがしている。



西光寺

9月27日



記念品を受ける三浦隆心住職



江上宗務総長挨拶



総代大森隆嗣氏謝辞

保寿寺

9月27日



記念品を受ける藤岡牧雄住職



総代高嶋孝二氏謝辞

増光寺

9月28日



会長土江英雄氏謝辞

長嚴寺

9月27日



佐分教学部長挨拶



総代盧原加良氏謝辞

本誓寺

9月28日



記念品を受ける延本輝典住職



総代陰山清二氏謝辞

富田寺

9月28日



記念品を受ける加藤文保住職



総代青戸春夫氏謝辞

謹賀新年



管長 大龍窟 有馬頼底

新年の御祝詞謹しんで申し上げます。

昨年は、出雲地区の巡教の折には、各寺院の各位、檀信徒の皆様には大変御世話になりました。あらためて厚く御礼申し上げます。本年も引きつづきお世話になりますので何卒よろしく願ひ上げます。

昨年もさまざまな行事がありました。二月には、秋の銀閣寺の研修道場の落慶にむけての六家元の献茶式の依頼のため、家元まわりをし、落慶法要は十月十六日に挙行し、十一月に六家元による献茶式も無事終了したことでした。三月二十五日には東山の泉涌寺に天皇后両陛下をおむかえして、久しぶりにお目に懸りお元気なお姿に安心したのでした。陛下は私と同年で、いつまでもお元気でいていただきたいと願うのみであります。四月には前管長止々庵老大師の半齋をつとめ、五月には例年の九州日田弁財天例祭に出頭、二十七日には、鹿苑寺に障壁画の完成落慶披露を行ない、京都高島屋、大分のトキワ百貨店、東京の日本橋高島屋の三ヶ所で展観披露をさせてもらい、入場者は六万人を越す大人気でした。六月は例年の知床半島の観音堂、大師堂、毘沙門堂の祭礼に出頭し、久方振

りの熊の母子三頭とも出合いました。

九月には出雲地区の巡教で大変お世話になり、本年もまたよろしく願います。

十月には寺庭婦人研修会で、私が小僧時代を過ごした日田の岳林寺に開山明極禪師に焼香三拝させていただきました。

この間、『禅、もたない生き方』（三笠書房）、『禅の逆襲』（春秋社）、『やさしくわかる禅語』（世界文化社）と三冊の本を出版させてもらいようこんでおります。

今年はまだ海外巡教もすでに入っており、命のつづくかぎり世界中とびまわることになりそうです。檀信徒の皆様、どうぞよろしく願います。

年頭御挨拶



宗務総長 江上泰山

本派寺院ご住職・寺庭婦人各位並びに相国会々員であられる檀信徒の皆様、明けましてお目出度うございます。

皆様お揃いで平成二十三年の新春をお迎えのことと衷心よりお慶び申し上げます。本山におきましては管長猥下を始めといたしまして、内局並びに一山共々お陰様で無事新年を迎えられましたのも、皆様方のご指導とご支援の賜物と有難く御礼を申し上げます。管長猥下におかれては、昨年下半年も相変らず海外並に国内を東奔西走のご活躍であり、宗派と致しましては、誠に有難いこととございまして特にご尊体のご保養にはお気をつけ頂きますようお願い致します。

その管長猥下に対し中国上海市内にあります玉佛寺覺醒住職よりご招待があり九月十三日より二泊三日の予定で本山内局と宗会議員さんら十六名で訪中し、相国寺と玉佛寺との友好関係を結ぶためと、管長猥下の自著二冊の中国語訳の出版祝賀会が併せて催され、玉佛寺内覺群会館に在

家も含め二百人以上が集まり、管長猥下の記念講演に聞き入り、又坐禅堂では日中の僧侶四十人で合同の坐禅も行なわれました。更には玉佛寺のお手配で上海万博の見学は特別待遇で、人気がピリオンのみを回れるよう配慮された事に感謝し、丁度その頃問題になりました尖閣諸島での中国漁船衝突事件での影響もなく無事帰国致しました。

さて本誌グラビアで詳報致しておりますように昨年九月二十七日、二十八日の両日、第五教区島根県の出雲地区六ヶ寺に対し管長猥下のご親教が行われました。ご親教も第八回目であり、ご親教の成果が各教区より喜びの声として挙がって来ており、第五教区各寺院にも早くから行き渡っていたと思われましたが、出雲空港には五教区の住職全員並びに寺院婦人や総代さん方が出迎えられ、各寺共盛大な歓迎を受けました。我々内局員も随行して各寺院を訪問しご住職並びに寺院婦人の皆さんの姿勢がいかに檀信徒の方々に反映されているか、寺院経営が順調に運営されているか等を拝見する為でもありました。

このご親教には終始一貫して第五教区宗務支所長であられる保寿寺藤岡牧雄住職が同行され過分のお世話を頂きましたことと、教区寺院住職方のご尽力に対し心よりお礼申し上げます。

幸いに両日共好天に恵まれ、各寺院では門前に檀信徒が拍手で一行を迎えて頂き、お抹茶を頂いたあと、本尊・開山・檀信徒各家の回向を管長猥下導師のもと厳修し、記念品として管長猥下の墨蹟が贈られた後、引続き管長猥下の法話に移り、法話の中核は何といっても憲法九条問題で「憲法九条が単に戦争放棄するのではなく、戦力を持たない、軍備を持たない」ということは、原因になるものを持たないということです」と力説され多くの方々に感銘を与えました。

この度のご親教でも感じた事でありましたが、住職並びに寺院さんと檀信徒の皆さんとの信頼関係は実にうまくいつている様見受けられました。やはりその地方地方に根差した布教の在り方というものは、おのずと身についた方法があり、我々の口を挟む余地のないところであります。どうか今後共、大乘仏教でいうところの「菩薩行」つまり「利他行」を身をもって実行して、益々第五教区が発展して行かれんことを念願致します。

最後になりましたが、平成十四年五月より三期九年間の長きに亘り、宗会議員各位よりご推挙して頂き宗務総長の要職を仰せつかって参りましたが、本年四月末日を以って任期満了を迎え退任致すことになりました。

その間賜りました数々のご厚情とご指導・ご鞭撻に対し心より有難く御礼を申し上げます。

思い返せば、就任早々の平成十四年秋には中国開封市の大相国寺より住職の心廣法師一行を迎えて、相国寺ご開山夢窓国師六百五十年遠諱法要を厳修し、大いに日中友好の絆を深め、昨年その大相国寺より友好の梵鐘が贈られ、到着して目下、鐘樓の建設が始められている処であります。

次に管長猥下にお願ひして六十年ぶりにご親教を始める事の出来た事は、末寺各寺院並びに檀信徒の方々と本山との関係をより密に出来た事は何よりの収穫の一つであり、宗務行政を担当する者の進んで行くべき責務と心得て、教学部長と部員各位の連携プレーのお陰げであり、各教区の宗務支所長並びに末寺各寺院住職と寺院婦人、更には檀信徒総代各位の熱烈な歓迎があったればこそと感謝致します。然し乍らやはり何といっても我々内局の意見と考え方をより理解して頂きましたことは、臨済宗各派の管長猥下の中でも特に忙しい管長猥下の熱意に対し深甚なる謝意を表して、最後のご挨拶とさせて頂きます。

皆様のご健勝とご多幸をお祈り致します。



相国会会長 片岡匡三

有馬頼底管長猥下ならびに本派寺院御住職、相国会会員、檀信徒のみなさま、新春を迎え益々御健勝のことと拝察いたします。

今年もまた、よろしくお願いいたします。

昨年十月二十一日、例年通り、開山夢窓国師毎歳忌法要が本山法堂で厳修されました。開山以来、六百有余年、滞ることなく祖師の御遺徳を偲び、敬い、御供養申し上げ、代々幾多の法難に遭遇しながらも、固く法灯を守って今日に至ったこと、誠に意義深く、心から敬意を表する次第です。また、この意義深い厳粛な法要に参じ、敬虔な思いに浸る光栄に浴する機会をお与え下さったことに感謝いたします。今回は、第四教区福井県の熱心な檀信徒さま百三十名が法要に参列されておられました。ご苦労さまでした。

昨年の管長猥下の御巡錫は九月二十七日(月)二十八日(火)、島根県出雲地区の六ヶ寺でした。御親教、誠に有難うございました。教区の御住職、檀信徒のみなさま、管長猥下の明るい笑顔と、柔らかい口調で、やさしく語りかける法話のひとこと、ひとことに深い慈悲の心を感じ、しばし法悦に浸ったこと、思います。今年も引き続き島根県を御巡錫されるとおききしております。管長猥下をはじめ、随伴の御住職のみなさま、御健康に御留意の上、よろしくお願いいたします。

次に、わが相国会会員、玉根徳四郎氏が、文化財庭園保存技術協議会代表として、春の「叙勲」で「旭日单光章」を受章されました。文化財の庭園の手入れに長年携わってき、後進に伝統技術を伝えている功績によるものです。たいへん名誉なことです。相国会会員一同心から祝意を表するものです。かつて金閣寺の「鏡湖池」の松の植こみの補修に、自ら池に入り、率先して弟子たちを熱心に指導しておられるお姿を拝見したことがあります。相国寺「承天閣美術館」の作庭もなさいました。夢窓国師の墨蹟「別無工夫」等の「寺の宝」を展示してある美術館にふさわしい立派な庭です。建物と周囲の自然との調和のとれた落ち着いたある作庭です。玉根氏の長年にわたる研鑽の上に築かれた、高い造園技術と「心」を感じました。益々の御精進と御活躍を期待してやみません。

私は現在、高等学校(敦賀)(医進コース)と専門学校(甲賀)(アスリート養成、柔道整復師養成コース)の教育担当の理事をしております。昨年三月、相国寺僧堂、小林玄徳

老大師の御厚意により、両校から若手教員一名ずつ、計二名、僧堂に於て二泊三日の修業の許可をいただきました。初日の二十六日は朝から大雪、寒風に晒らされての夜坐には相当苦しんだようです。生まれて初めての僧堂の生活。生涯忘れえぬ貴重な体験であったに違いありません。御老師の厳しい中にも温情溢れる御教導には感動し、心から感謝をいたしておりました。また、「二十四時間」の生き態を赤裸々に御教示下さった雲水のみなさまには、驚嘆と尊敬と、感謝の念でいっぱいの方でした。今も、時々話題にのぼります。この度の厳しい体験をやりぬいたことで彼らは自信と誇りを手に入れたようです。誠に有難うございました。

四月新学期から、それぞれの学校で「坐禅」の講座を設けました。日ごろ、とかく見失いがちな主人公の「自己」をしっかりと見つめる時間としています。「姿勢を正す」「呼吸を整える」この二つの徹底を当面の目標としています。「坐禅」は今後も彼らとともに実践していくつもりであります。今後、いろいろと御助言等頂戴いたしたく、よろしくお願いいたします。

最後になりますが、今年もまた、「支えられて生きている」ことに感謝し、「今日、只今」を大切に生きていこうと思っております。

みなさま、よき年でありますよう祈念いたします。

合掌

御親教日単

有馬頼底管長、江上泰山宗務総長、佐分宗順教学部長、矢野謙堂部員(侍衣・記録)、荒木泰量部員(侍衣・記録)

9月27日(月)

午前6時 本山出発(タクシー)

9時20分 保寿寺到着 門前多数の出迎え、書院にて到着茶礼

9時45分 殿聲五聲支度、全連声出頭、有馬管長、江

上宗務総長、佐分教学部長、保寿寺藤岡牧雄住職、全藤岡大拙閑栖和尚等出頭、同教区尊宿が司会進行、若手和尚等が維那・玉鱗を務める

一、心経、消災呪、本尊回向
二、大悲呪、開山回向(※以下各寺同式次第)
三、甘露門、檀信徒先亡回向
保寿寺へ御親教記念品贈呈

(管長猥下墨蹟書き下ろし)

管長猥下法話

宗務総長挨拶

教学部長挨拶

檀信徒謝辞 総代 高嶋孝二氏

記念撮影

10時45分 御親教終了、同寺にて齋座、住職、閑栖和尚同席

午後12時40分 先駆、保寿寺出発、全50分管長、総長出発

12時45分 先駆西光寺到着、全55分管長、総長到着、

大勢の出迎えを受ける、書院にて到着茶礼
1時10分 御親教開教、西光寺三浦隆心住職、五教

区藤岡牧雄宗務支所長等が出頭
諷経後西光寺へ御親教記念品贈呈、
その後管長法話、総長、教学部長挨拶
檀信徒謝辞 総代 大森隆嗣氏

2時 記念撮影、御親教終了

2時25分 先駆長嚴寺へ出発、引続き管長、総長出発

2時30分 管長、総長長嚴寺到着、雨天のなか門前
多数の出迎え、到着茶礼
2時45分 御親教開教、加藤文保兼務住職、藤岡支
所長出頭

(※大悲呪、開山回向は省略)

諷経後長嚴寺へ御親教記念品贈呈

管長法話、総長、教学部長挨拶

檀信徒謝辞 総代 廬原加良氏

記念撮影

3時55分 御親教終了、雨中見送りを受け長嚴寺を

出発、投宿先「出雲空港ホテル」へ向かう

4時 ホテル到着

6時30分 葉石、ホテルにて第五教区各寺院住職、寺

庭婦人並びに総代出席のもと懇親会

り、書院にて到着茶礼

9時20分 御親教開教、藤岡牧雄兼務住職出頭

(※大悲呪にて開山並びに先々住樋野澤堂和尚回向)

諷経後増光寺へ御親教記念品贈呈、その

後管長法話、総長、教学部長挨拶

檀信徒謝辞 護持会会長 土江英雄氏

記念撮影

10時15分 御親教終了

10時35分 先駆富田寺へ向け出発、全45分管長、総長

出発

10時50分 管長、総長富田寺へ到着、大勢の出迎えを

受ける。書院にて到着茶礼

11時 御親教開教、富田寺加藤文保住職、全原

島大哲閑栖和尚、藤岡支所長等出頭

諷経後富田寺へ御親教記念品贈呈、その

後管長法話、総長、教学部長挨拶

檀信徒謝辞 総代 青戸春夫氏

記念撮影

9月28日(火)

午前8時40分 先駆、ホテル出発、増光寺へ向かう、全50

分管長、総長出発

8時50分 先駆増光寺に到着

9時 管長、総長増光寺到着、多くの出迎えあ

午後12時10分 御親教終了、同寺にて齋座、藤岡支所長

同席

1時10分 先駆本誓寺へ向け出発、全20分管長、総長

出発

1時20分 先駆本誓寺に到着、全30分管長、総長到

着、多くのお出迎えを受ける、書院にて

到着茶礼

1時50分 御親教開教、本誓寺延本輝典住職、藤岡

支所長出頭

諷経後本誓寺へ御親教記念品贈呈、その

後管長法話、総長、教学部長挨拶

檀信徒謝辞 総代 陰山清二氏

記念撮影

3時 御親教終了

3時30分 荒神谷遺跡・博物館を同館長藤岡大拙保

寿寺閑栖和尚の案内にて見学

5時25分 出雲空港出発、6時25分伊丹空港着

8時 無事本山到着



平成二十二年度 在錫者名簿(雪安居)

京都南	光雲寺徒	中川秀峰	兵庫妙	靈雲寺徒	林明慶
京都相	光源院徒	荒木文元	石川国	吉祥寺徒	山田慈康
香川東	正楽寺徒	上杉正航			

御親教寺院紹介

保寿寺

〒六九九・〇五五二 島根県鏡川郡斐川町中洲四四五
電話 〇八五三・七二・三三七〇(FAXとも)

山号 安楽山
開創 十八世紀初頭ころ

開山 天珪周悦和尚

本尊 阿弥陀如来(鎌倉時代)

伽藍構成 方丈 庫裡 観音堂 地藏堂 鐘楼

寺域坪数 一一〇〇坪

住職代表役員 藤岡牧雄(第十四世)

年間行事

大般若

山門施餓鬼(八月三日)

弁財天夏祭(八月十四日)

地藏祭り(十二月)

康正三年(一四五七)の年記のある古文書にその存在が記されている。

元の保寿寺は、密教系の鰐淵寺の末寺の一つだったと思われるが、いつしか無住となり、天珪和尚の弟子たちにより再興され、興聖寺系の禅寺、安楽山保寿寺となった。

明治に入り、小本山は大本山に合併となり、興聖寺は関係の深い相国寺の傘下に入り、保寿寺など出雲の富田寺一派も相国寺の末寺になった。

大正五年(一九一六)鏡川郡斐川町大字沖州正久寺一二五にあつて相国寺派保寿寺末となっていた常徳寺は廃堂となり、寺産、什具等を保寿寺に譲渡する。戦後農地改革で寺田を没収され、次いで区画整理で境内地を失つたため廃寺となり、本尊阿弥陀仏と歴代塔墓は保寿寺に移され受け継がれている。

●由来・沿革

保寿寺は天珪和尚(富田寺の開山)を勧請開山として、およそ三百年前に創建されたと思われるが、実はそれより以前、室町中期にすでに存在していた。

西光寺

〒六九九・〇五五四 島根県鏡川郡斐川町三分市五二七
電話 〇八五三・六二・五一四六

山号 鼓音山

開山 天珪周悦和尚

本尊 阿弥陀如来(元禄七年・一六九四)

脇侍その他 達磨大師 大権菩薩

伽藍構成 本堂 庫裡 地藏堂 鎮守他

寺域坪数 一〇一〇・七坪

改修 本堂・庫裡改築(平成九年・一九九七)

住職代表役員 三浦隆心(第十一世)

年間行事 大般若会(三月)

施餓鬼会(八月四日)

布教活動 坐禅会(二月一日)

研修旅行(六月)

地藏祭(十月)

婦人部活動

地域活動 子供坐禅会

落語会

ミニコンサート等

たものとされている。

のちに京都興聖寺にて修行された天珪周悦和尚が、富田寺を臨済宗の寺として慶安二年(一六四九)に再興し、その弟子により慶安三年(一六五〇)、天珪和尚を勧請開山に迎え、西光寺も臨済宗興聖寺派の寺院となった。

元禄七年(一六九四)四世祖元和和尚は、当山御本尊阿弥陀如来を大阪の佛師に依頼して荘厳し開眼した。

明治に入り、小本山は大本山に合併させられたため相国寺派の末寺となった。明治十五年(一八八二)八月、八世鑑宗和尚により本堂が再建され、昭和十二年(一九三七)六月、九世翠翁和尚により庫裡が建設された。

平成九年(一九九七)六月十五日、本堂および庫裡を改築再建し、大龍窟相国寺派管長を導師に迎え落慶法要を厳修した。

●由来・沿革

西光寺の開創は定かではなく、天台宗鰐淵寺の末寺として存在していたが、時代とともに衰退していつ

長嚴寺

〒六九九・〇六四三 島根県簸川郡斐川町原鹿一六七七
電話 〇八五三・七二・八〇一六

山号 瑞雲山

開山 天珪周悦和尚

本尊 薬師如来

脇侍 日光菩薩・月光菩薩・十二神将

伽藍構成 本堂 鎮守社(多聞天)

寺域坪数 一五〇坪

住職・代表役員 加藤文保(兼務)

年間行事 正月行事 お盆行事 山門施餓鬼会

を建立する。

原志摩守の法名は長嚴院殿と号し、寺号を長嚴寺とする。

明治六年(一八七三)の斐伊川氾濫で一族が分散したが原家の菩提寺として今日に至る。

現在の本堂は富田寺と同じ棟梁が関わったと伝えられる事から、天保年間(一八三〇～一八四四)の再建と考えられる。

原志摩守の法名は長嚴院殿と号していることから、原鹿の地に新たに建立した寺の寺号を長嚴寺とし、原家一族の菩提寺としたと伝えられている。(土地の古老の口伝による)

●由来・沿革

創立年月不詳。天正年間(一五七三～九一)原志摩守が故あって出雲郡原鹿の地に居住し此の地に寺院

増光寺

〒六九九・〇六四二 島根県簸川郡斐川町福富一六

山号 仏日山

開創 不詳であるが天正以前と伝える

開山 天珪周悦和尚(勸請開山)

本尊 阿弥陀如来(木造)

寺宝 阿弥陀・観音・四天王の六体の仏像

住職・代表役員 藤岡牧雄(兼務)

●由来・沿革

増光寺の開創は不詳であるが、もともと天台の大刹、鰐淵寺の末寺として建立されたらしい。のち衰退したが、富田寺開山、天珪周悦和尚(京都興聖寺九世伯英祖泰の法嗣)を勧請し、興聖寺末の禅寺と

して再興された。付近に鎮座する都牟自神社の境内社、八幡宮の神宮寺として、神事にも参画したという。幾度かの火災により、寺宝や記録類を焼失した。

富田寺

〒六九九・〇六二一 島根県簸川郡斐川町大字富村七七七
電話 〇八五三・七二・〇九七七(FAXとも)

山号 金龍山

開山 天珪周悦和尚

本尊 釋迦牟尼佛

寺域坪数 八〇〇坪(能満寺を含む)

住職・代表役員 加藤文保

年間行事 正月行事

五教区一派年頭諷経及び開山忌

山門施餓鬼会

春期説教会

春夏檀信徒総会

と北島という地名の境界近くに向富田寺という地があつて、そこに建っていたという言い伝えもあるが、詳しいことはわからない。

慶安二年(一六四九)、天珪周悦和尚が現在地(当時の富村大字中村)に移転して臨濟禅寺を建立されたものである。

天珪周悦和尚は初め、比叡山に登って天台宗を学ばれたが、更に京都市内相国寺派であった興聖寺第九世伯映祖泰禅師について臨濟禅を修め帰国後、付近(現在の出雲市、斐川町)に十数カ寺を開いた。本堂再建、天保六年(一八三五)。

●由来・沿革

創立年月不詳。往古は天台宗であり、当時は富村

本誓寺

〒六九九・〇六一三 島根県鏡川郡斐川町大字神氷五四一
電話 〇八五三・七二・八三四九 (FAXとも)

山号 延命山
開山 天珪周悦和尚(勧請)
山 桂山祖文和尚(再建)
本尊 延命地藏菩薩
寺宝 墨蹟少数あり
伽藍構成 本堂 庫裡 観音堂
寺域坪数 三九〇坪
改修 本堂屋根替え(昭和四十五年・一九七〇)
観音堂屋根替え(昭和五十三年・一九七八)
参道工事(昭和五十九年・一九八四)
鐘楼新築(平成十七年・二〇〇五)
住職代表役員 延本輝典(第十世)
副住職 延本秀道
年間行事 施餓鬼会 岩屋葉師講(八月七日)

●由来・沿革

本誓寺は斐川町、仏教山の麓にある。
一説には「出雲大社の領地であり、寺院は出雲大社上官の外護を受けていた。天正十九年(一五九一)、毛利輝元により出雲大社領から外され急速に退転していったものと思われる。斐川町地域にあったたぐさんの天台宗鰐淵寺末庵が、この時退転してしまっ

た。」(保寿寺寺史より)とある。

本誓寺も一寺庵だったのではないだろうか。天珪和尚の弟子たちにより、周囲の退転した寺庵が再興され、天珪和尚を勧請開山に迎えたと思われる。

この時期に興聖寺派となり、その後、また退転し無住の寺になってしまい、宝暦年間(一七五一〜六三三)に桂山祖文和尚により再興されたが、慶応年間(一八六五〜六七)頃に火災に遭い全焼した。

当時は、今の境内より十メートル山上にあった。資料もその時、焼失したものと思われる。顯宗々孚和尚により再建。

明治時代に小本山は大本山に合併させられたため、明治四十五年(一九一二)、興聖寺派より相国寺派に転派。以来、相国寺の末寺となっている。

本堂屋根修復工事は、昭和四十四年(一九六九)九月十五日より始まり四十五年(一九七〇)に完成。参道工事は、昭和五十九年(一九八四)に完成。

観音堂の屋根修復工事は、昭和五十三年(一九七八)に完成。
鐘楼新築工事は、平成十六年(二〇〇四)より着工平成十七年(二〇〇五)三月に完成。

水源地蔵像は、平成十七年(二〇〇五)三月に完成。無縁仏の観音像は、平成十九年(二〇〇七)一月完成。

御親教 感想文

保寿寺御親教に思う

保寿寺総代 錦織朝文

九月二十七日は、先般来の酷暑が去り、爽やかな秋晴れの朝を迎えました。待ちに待ったこの日を檀信徒一同、不安と期待を持ってお待ちしていました。

有馬管長様が長柄傘を伴い山門より入られるのを百数十人の檀信徒がお迎え致しました。管長様にこやかで柔らかな気負いのない自然なお姿に接し、感激のあまり我を忘れ合掌し、お迎えさせて頂きました。

管長様ご一行様茶礼休息の後、当山御本尊様、開山・歴代祖師様、檀信徒御先祖様への御回向を頂いた後、もったいなくも記念品を頂きました。当寺の寺宝として後世に伝えてまいります。

管長様の御法話では「般若心経」の中で何度も唱えられている『無』『空』の様に心の中を空っぽにし、嫌なこと、悲しいことなど様々な煩惱を取り除く事は、精神世界の中で可能であると説かれました。

この度の御親教で管長様のお姿を間近に接し、

親しくお言葉を頂きましたことは、檀信徒にとりまして一生忘れることの出来ない貴重な素晴らしい思い出となると共に、大本山相国寺との絆がさらに強く結ばれたことと確信しております。

江上宗務総長様からは、多くの檀信徒の迎えを受けて感激したこと、全国の末寺をくまなく巡ることにより本山と末寺の間の風通しをよくし、さらには絆を強くしていきたいとお話がありました。佐分教学部長様初め皆様からは御親教を迎えるにあたり、準備が行き届いており大変気持ち良かったことなどの御言葉をいただき、檀信徒一同報われた気持ちになりました。

管長様を取り囲む様にして記念写真を撮りましたことは、檀信徒にとって生涯の記念になることと思います。また、地元の出雲そばづくり腕自慢の方が庫裏でつくりあげた出来立ての蕎麦を、管長様初めご同行の皆様にご賞味いただけましたこと、私も思い出の一つになりました。

最後に、有馬管長様、本山からご同行された皆

様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。また、教区各寺院の和尚様方には大変お世話

になり心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

御親教
感想文

管長猊下の御親教をいただき

西光寺総代 飯塚雄哉

今夏は異例の猛暑が続きました。やっと涼しくなった九月二十七日、管長猊下の御親教が行われました。

西光寺檀信徒が合掌をしてお迎えする中を管長猊下は笑顔で御一行と共に庫裏へ向かわれ、檀信徒の合掌は、やがて盛大な拍手に変わりました。

十三時十分、法要が厳修された後、管長猊下の御法話を拝聴することが出来ました。

「別無工夫(別に工夫なし)足利直義(尊氏の弟)と開山夢窓国師様との問答の中の言葉であるということでした。人間は策略を考える。出世、地位、財産など人間の欲望として当然の事であるが、開山様は、「当然の事として捨てよ」とおっしゃった。禅宗には「本来無一物」という禅語がある。般若心経には「無」「空」の文字が沢山あると教えてい

ただいた。私如き凡人には、原点として肝に銘じて置くべきお悟りを頂いた感が致しました。

また、当寺の御本尊が阿弥陀仏であることに触れられ、阿弥陀様は、私共に、計り知れないお力を与えて下さっている。そして、御本尊様が守り続けられている。

管長猊下は、平和を重視しておられ「憲法第九条(戦争放棄)」「核兵器廃絶」に触れられ、戦争は殺人ゲームである。核兵器は人殺しの道具であると述べられ、生きるものは生命の輝きを持っている。その輝きを守つていこうと諭されました。

目まぐるしい変化を来している現世で、つい忘れがちな人の心の在り方をご教導いただき、有難く感謝申し上げます。

御法話の後、江上宗務総長様、佐分教学部長様

から御挨拶があり、本山と末寺の間に親近感を感じさせて頂きました。

御親教は、今後も継続されるとのお話があり、大本山相国寺の御発展と管長猊下をはじめ御一行

様の御健勝をご祈念申し上げます。誠に有難うございました。

合掌

御親教
感想文

長嚴寺御親教を拝して

長嚴寺総代 原 務

午前中、晴れていた出雲平野の空に、お昼過ぎから厚い雲が広がりはじめ、心配していた雨が降り出していました。

檀信徒一同総出で、合掌してお迎えする中、管長猊下は親しく笑顔で会釈されながら、本堂にお入りになりました。

茶礼の後、管長猊下大導師の下で、法要が始まり、本尊回向、檀信徒各家先祖の回向を頂き、勿体無くも誇りに思われ、感激に震えながら唱和させて頂きました。

管長猊下のご法話は「雨も又、農作物には必要」と、心配した我々の心を和ませる様に始まり、配りの温かさを感じました。

当寺の御本尊、薬師如来様は、身体の病気は本より心の病も治して下さるとのお教えから、禅宗は体験の宗教で有り、身をもって行動し体感することの大切さをお話し下さいました。

中国やアジア各国での参詣の話、仏教と世情のお話から、世界平和の尊さ、核廃絶の働きかけと、実践なされるお話に強い感銘を受けました。

江上宗務総長様は就任時より、全国末寺への管長猊下御親教を企画なされ、「来年度で全て訪問を終えます。」とお話しも、ご自身、来春で任期満了との事で、私は大変残念に思いました。

佐分教学部長様は「円明」の編集から、各種研修のお世話等、本山のお仕事をわかり易くお話し下

さいました。

「京都にお出かけの折には、気軽に立ち寄って、声を掛けて下さい」と、御案内も頂きました。有難うございました。

管長猥下より賜りました記念品は、寺の宝とし

て、御親教の教えと感激を次の世代に語り継ぎます。

遠路遙々、小さな末寺迄お越し頂き、御親教下さいました事に心より感謝申し上げます。

誠に有難うございました。

御親教
感想文

増光寺御親教に思う

増光寺総代 遠藤泰三

前夜の激しい雨が嘘のように晴れて、秋らしいよい天候に恵まれた九月二十八日午前九時、待ちに待った大本山相国寺の有馬管長猥下御一行様がここ増光寺にお着きになりました。そして、お迎えした檀信徒一同に笑顔いっぱいにお応えになりながら本堂へと入られました。

ここ増光寺は、久木村誌によりますと明治初期頃までは、都牟自神社の神護寺として、神社に附属していたということですが、慶安五年（二六五年）に開基され、現在二〇一〇年で、三百五十年以上の長い歴史を持つお寺であります。現在、保寿寺住職様に兼務でお世話になっている

お寺でございますが、こうして大本山相国寺より有馬管長猥下御一行様をお迎えできることは檀信徒一同誠に有り難く感激の至りであります。

ご到着、茶礼後、法要が始まり本尊回向、開山歴代祖師回向、檀信徒各家先祖回向が厳肅に執り行われ、記念の品まで賜りました。この記念の品、本寺の宝として大切にさせていただきます。誠にありがとうございます。

続いて、有馬管長猥下の御法話をいただくことができました。「今、いろいろと厳しい時代ではあるが、人間は生まれるときも裸、死ぬときも裸、何も持つて行くことはできない。般若心経の中で

も「空」とか「無」ということが言われている。心の中を空っぽにして「こだわる心」を捨てて生きることが大切である」と人としての生きる基本をお教えいただきました。また、仏教の国、中国のことにもふれられ、「臨済禅師のお墓のある中国に何回も行った。そのお墓は古くなって石が崩れて

りますが、大本山が開いたお寺となるように大変なご尽力をいただいていることを知り、その御配意に感謝した次第であります。

また、佐分教学部長様からは、御親教を始めたことに付け加えて、「自分が大本山相国寺発行の『円明』を編集しているので、皆さんからの声もいただきたい」とのお言葉をいただきました。編集をされている方からの直接のお声がけをいただき、改めて「円明」を見直しました。そして、このご本からもしっかりと学んでいかなければいけないと思いました。

落ちるほどの状態であるが、民衆の中には何日もかけて拜みに来る人もありたくさん参拝者がある。中国は社会主義の国であるが、社会主義だけでは人は救えない。やはり信仰の心・仏の教えが大切である」と広い立場から仏教の大切さをお教えたいただきました。有馬管長猥下には柔らかく和やかな雰囲気でお話の基本が分かるように話しかけてくださり、檀信徒一同心にしみる思いで拝聴させていただきました。

また、江上宗務総長様、佐分教学部長様からもお言葉をいただきました。江上宗務総長様からは

謝申し上げる次第であります。

「大本山に行っても『冷たい』という声があり、本山と地方との風通しをよくするため、八年前から御親教を九州から始めて今年は出雲に来ている。皆の力で兼務住職と共にこのお寺を守ってほしい。」とのお励ましのお言葉をいただきました。大本山は、私たちにとりましてとかく遠い存在であ

最後にになりましたが、有馬管長猥下を始め本山和尚様やお世話をいただきました和尚様方、また、お迎えするにあたりいろいろとご指導をいただきました保寿寺住職様に、増光寺檀信徒を代表して心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございます。

御親教
感想文

富田寺御親教を拝して

富田寺総代 青戸春夫

秋晴れに恵まれた平成二十二年九月二十八日午前十時四十分、檀信徒一同山門通路両側に整列し合掌して、大本山相国寺管長猥下ご一行様をお迎えいたしました。

管長猥下は笑顔で会釈され「ありがとうございます苦勞さん」との第一声に、私は何とも言い難く、暖かい日溜まりに居るが如く、深いご慈悲に包みこまれる感銘を受けました。

大玄閣よりお入りになり、書院にて茶礼の後、管長猥下大導師の下で法要が始まり、本尊回向、開山回向、檀信徒各家先祖代々の供養をして頂きありがとうございます感謝申し上げます。

続いての管長猥下のご法話は、相国寺建立のお話を中心に分かり易く且つ興味深く、穏やかに語りかけるようにお話しいただきました。

その後、江上宗務総長様、佐分教学部長様のご挨拶があり、本山の様子などをご丁寧にお話しいただき、檀信徒一同本山が身近に感じられる思いがいたしました。

次に、管長猥下ご一行様と檀信徒一同で記念写真を撮り、生涯の思い出となりました。

最後になりましたが、管長猥下ご一行様のご健康とご多幸をお祈りいたしますとともに、相国寺の今後益々のご発展を心よりご祈念申し上げます。

御親教
感想文

本誓寺御親教に思う

本誓寺総代 陰山清二

本誓寺住職延本和尚より、九月に相国寺管長猥

下の御親教でご来寺のお知らせがありました。こ

れは一大事、聞くところによれば、当寺では七十年ぶりとのこと、帰依心のみがえるよい機会と大変嬉しく思いました。

お迎えする準備として、当寺の本堂の欄間に掛けてある名画、山水絵図は四枚、表裏八面は立派なものです。古くなり煤けて黒く汚れているため、専門業者に依頼し修理しました。修理費は高額でしたが立派によりみがえった感じです。

九月二十日には当寺護持会役員総動員でお寺の庭掃除をしました。参道には八十段の石段、その両脇には高さ5mの石垣、それに根付いた雑草、木を刈り取りきれいになりました。あらためて、きちつとしたたすまい、立派な石垣であることを再発見する思いです。これでお迎えする準備は万端ととのいました。

九月二十八日午後一時三十分、爽やかな秋晴れのもと、大本山相国寺の有馬管長猥下御一行が多くくの檀信徒が門迎する中をご到着になりました。管長様は大傘の下より、にこやかな笑顔で親しく会釈され檀信徒一同合掌でお迎えました。

しばらく休憩、茶礼の後、鐘が響き、管長様が正座につかれ、江上宗務総長様、佐分教学部長様、藤岡支部長様、当寺住職も所定の座におつきにな

り、摩訶般若波羅蜜多心經、本尊様御回向、開山様御回向、檀信徒各家先祖御回向が厳肅に執り行われました。私共檀信徒をばげまして頂いたものと思ひ、あらためて精進を重ね、先祖代々の供養の心を持ち続けたいと思ひました。続いて管長様直筆の書『松に古今の色無し』を記念品として賜りました。当寺の貴重品として後世に伝えることになりました。有難うございました。

引き続き、管長様の御法話を頂きました。大本山相国寺の創建や御開山について、さらに戦争のない世界平和の実現に努力なさっていることもお話しになりました。この御法話をとおして、檀信徒はどのように生きるべきか、どう過ごすべきか、ご教示いただき、心満たされ有難い気持ちで一杯になりました。

管長様に続き、江上宗務総長様、佐分教学部長様からも、それぞれにあたたかいご挨拶を頂き有難うございました。

最後になりましたが、この度の御親教に際し管長様をはじめ本山の和尚様方、お世話を頂いた教区の和尚様方に心より厚くお礼申し上げます。

合掌

伊藤 若藤 と 表具

古文化財保存修理 浩悦庵 矢口 恵三

伊藤若冲(一七一六〜一八〇〇)はその八十六年の生涯を生き抜き、後世に残る数々の作品を残した江戸時代を代表する稀代の画家である。近年、その卓越した画業や、他に類を見ない独創性に対する評価がますます高まり、その人気は世代を超え、今や同時代の巨匠達をものぐ勢いである。今回は長年表具の仕事に携わってきた筆者の目から見た若冲の新たな魅力について、若冲と表具との関わりという視点から触れてみたい。

その前に、まず表具とはどのようなものであろうか？

表装とは？

表具とは、広辞苑によると「布帛または紙を貼って、巻物・掛物・書画帖・屏風・襖などに作り上げること。表装。装潢^{そうじゆう}。」とあり、一口に表具と言っても

もその意味する形態は多岐にわたり、日本の絵画は表具とは切っても切り離せない関係であることがお分かりいただけると思う。日本の絵画の歴史において、絵師がその制作段階で、どの程度表具に関わってきたのかについては非常に興味深いところであるが、今回はその中の掛物つまり掛軸について採りあげたい。掛軸における表具あるいは表装の役割は東洋の書画の「装い」あるいは「衣服」のようなもので、西洋絵画における額縁以上に作品鑑賞の上で大変に重要なものである。なぜなら、その書画(本紙)の筆者や内容によって廻りの表具に用いる裂の取り合わせや表具の形式も異なり、表具次第でその書画が一層引き立てられたり、壮麗さや格式をも与えるからである。他方では、表具には作品を保護、保存する上でも大切な働きがあり、機能性としての「衣服」の役割も兼ね備えている。その衣服を構成する主な部位は次のとおりとなる。

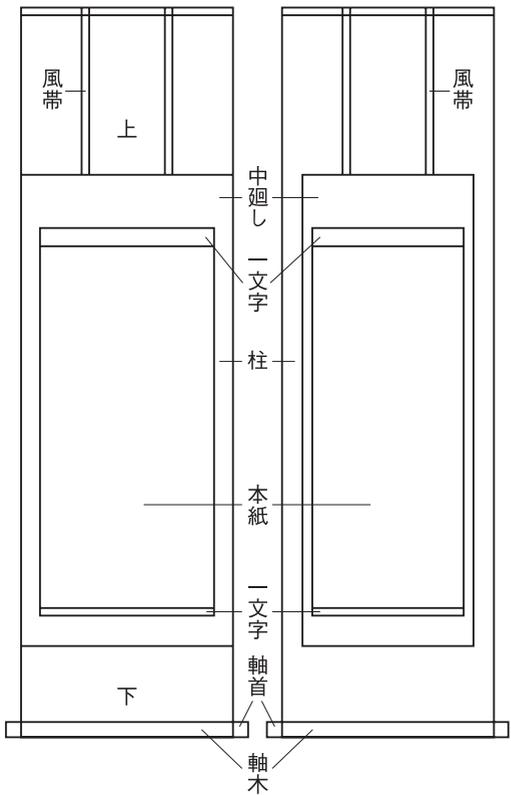
本紙 絵画・書画など表装される本体。主に紙・絹が用いられ、それぞれ紙本・絹本と呼ばれる。

一文
字
中廻し
上
下
風帯

本紙の上下に付けたもので、金襴等の裂地を用いる。
中縁ともいう。また、本紙の左右の縁を柱という。一文字に次ぐ格の裂が用いられる。
中廻しの上下に付くもので、天地ともいう。仏表具の場合は上下が外周を廻るので総縁という。
上部から上の長さ分垂れ下がる裂。裂地は一文字あるいは中廻しと同じものを用いる。
もともと、中国で燕除けのために付けられたなごりであると云われる。貼り付けたものを貼風帯・押風帯という。

軸
軸首のこと素材は、象牙・紫檀・花梨・角・竹・塗物・金属・水晶・陶器等がある。形状も多様である。

表具の形式の一例



本紙を取り囲む以上の部位は通常、それぞれ異なった裂を用い、一文字—中廻し—上下と本紙から遠ざかるにしたがって、裂地の質を下げるようになっていく。茶道においては、本紙から一文字—中廻し—上下と鑑賞し、全体のバランスを味わうことは掛軸を見る心得の一つであるとされている。

ではそもそも表具はいつごろから行われていたのだろうか？

表具の歴史

表具の歴史は古く、日本における表具（ここでは主に掛軸）は仏教の伝来と共にもたらされた中国の経巻や仏像画などの擬製に端を発するとされている。現在の掛軸の様式は、中国宋時代に発達したものが伝わり、鎌倉時代などに中国の禅僧の將來した掛物を擬製したのに始まるとされている。なお、屏風や衝立、襖の原型と見られるものの記述は奈良時代から平安時代の文献に登場している。

また、我々のような表具を生業とする職業が登場するのもその頃であるが、装潢手や経師と呼ばれ、経巻や仏像画の表装に止まっていた。鎌倉時代に禅宗が渡来してから、宋朝式の表具が伝えられ、同時に伝来した宋音の裱褙師という言葉とともに裱褙師という表具専門の職業が始まる。しかし、これは中国の方式をそのまま継承する形ではなく、それまでの装潢手による表具と融合しながら日本独自の様式に発展させたと考えられる。

更に表具の発達には我が国の建築様式の変遷とも深い関わりがある。

現在に伝わる床の間は、やはり禅宗とともに伝来した禅宗寺院に用いられていたものを、鎌倉時代の末にこれを真似て武家に設けたのが起こりとなり、後世の書院へとつながる。床を飾る上で掛物は不可欠であるが、東山時代、足利義政の同朋衆（將軍の庇護のもと雑務や猿楽、庭園作

りなどの芸能を司り、阿弥号を持って剃髪し立花、茶湯、香、連歌などの一芸を持ち、目利きとして唐物選びや座敷飾りをして將軍と客人との遊興の場を作るなどし、更に表装や出納も行った、現代で言うところの將軍直屬の多才なアートディレクターとでも言うべき人々であった能阿弥、芸阿弥、相阿弥らが書院座敷飾りの様式を創案した。この際に、床を飾る掛物についても様式が定められたと伝えられる。

次にその表具を仕立てるにあたっての決まりごとを述べたい。

表具の形式

茶道では一般に

真・行・草の三体を

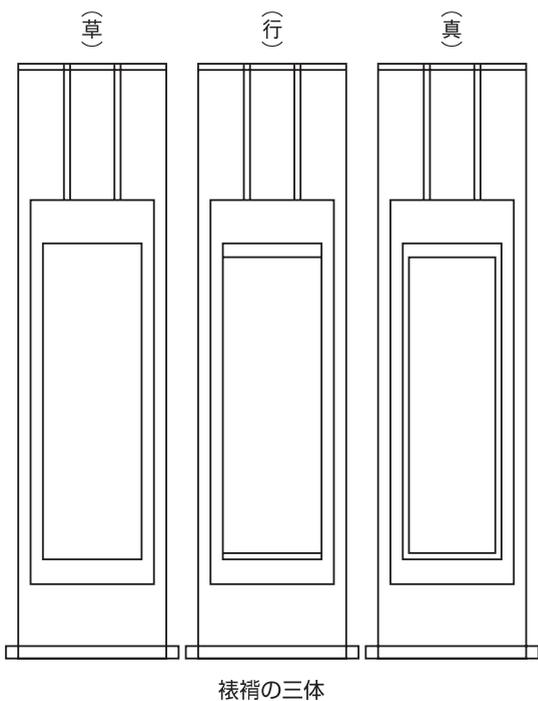
立てるが、表具にもやはり真・行・草の三体の式がある。これは、前述した足利義政の同朋衆であった能阿弥、相阿弥らが定めたとされる。表具の形式は格式の高い順に袷襦(真)、幢襦(行)、輪襦(草)と呼び、さらにそれぞれ真・行・草があるが、草には真がないので、全部で八式の基本形式となる。

袷襦は、仏教的内容(仏画・頂相・曼荼羅・題目・名号等)の書画に限られ「神聖表具」、「本尊表具」、「中尊表具」

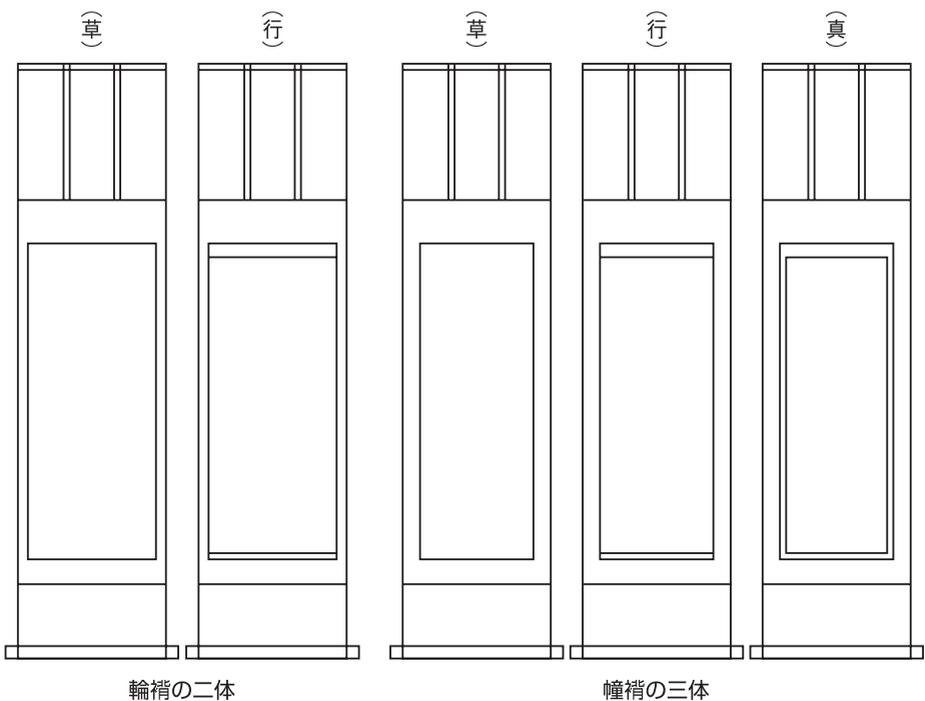
とも呼ばれる。最も格式の高い形式である。

幢襦は「大和表装」、「三段表装」等と呼ばれ、歌切、懐紙、色紙など文人画や南画以外の古・新画等幅広く用いられる。

輪襦は茶掛軸、茶匠禅僧の墨蹟、水墨画に用いられる。中廻しの左右の柱が狭くなっている。



袷襦の三体



幢襦の三体

輪襦の二体



行ノ真
普賢菩薩像



真ノ真
釈迦如来像



行ノ真
文殊菩薩像

また、この三体の他にも様々な様式があり、文人画や南画等には明朝表具、袋表具の形式をとる。このように、その書画の内容によって「衣服」であるところの表具の形式つまり、デザインは決定する。

次に「衣服」の印象や雰囲気を決める素材つまり表具の裂地については、これも実に多様な素材、柄、色が使用されている。羅や紗に金箔で文様を置いた印金や、金紗、紗金、金欄・銀欄（金糸・銀糸の織物）、一色または二色、三色で模様を織り出した緞子、一色で織る斜子、無地色のシケなどが用いられる。この裂地の模様や取り合わせには時代やその時の所有者の好みが強くと反映する。

例えば、室町時代の東山御物には豪華な総金襴の掛軸があるが、千利休の時代には佗び表具が好まれ、裂の代わりに紙を用いる紙表具が取り入れられる。更に様式として、珠光様や紹鷗様、織部様、有楽様、三斎様、遠州様、石州様、宗和様、宗旦様など茶道の各宗匠好みの表具も登場する。表具は、本紙を引き立てるのは勿論のこと、本紙に因んだ柄や色を表装裂地に取り入れることにより、所有者の教養の深さや遊び心、色彩やバランス感覚が反映され、本紙に新たな価値をも添えるため、時代の数奇者たちは表具を通してその洗練されたセンスを競い合ってきたといっても過言ではないであろう。

さて、ここから本題に入りたいが、では伊藤若冲は表具とどう関わってきたのだろうか？

これまでも何度か若冲の作品の修復をさせていただく機会に恵まれてきた。その中でも大本山相国寺「釈迦三尊像」修理の際の表具にまつわるお話をご紹介したい。この三幅（釈迦如来像・文殊菩薩像・普賢菩薩像）の掛軸は一七六五年（明和二年）若冲五十才の時に「動植綵絵」三十幅（最初は二十四幅であった）とともに相国寺に寄進されたもので、釈迦三幅対の表具裂地は寄進当時のものであった。

ここで少し補足説明を加えたい。

まず、伊藤若冲の生家の宗旨は浄土宗であったが、禅宗の相国寺に何故寄進したのかについては、大典顕常和尚（一七一九―一八〇一）という禅師の存在を抜きには語れないであろう。

大典禅師梅莊顕常は相国寺第百十三世住持であり、若冲が師と仰ぎ、生涯の精神的なパトロンであった。大典禅師との交流を通じて若冲は禅宗に傾倒し帰依していく。「若冲」という名も彼の命名とされ、「若冲」とは老子の第四十五章にある「大盈は沖しきが若きも、其の用は窮まらず」

からきており、その意味は（大きく満ちているものは、中が空っぽのようにみえるが、実はそのはたらきは窮まることがない）ということだそうだが、若冲という非凡な画家の本質を見抜いたともいえる、大典禅師の撰名が若冲を若冲たらしめていると思えるほどに見事な命名である。

若冲は、京都の青物問屋の長男として生まれ、父の死後二十三歳で家業を継いだものの、商売に興味を持つことができず、四十歳で弟に家督を譲ってからは、ひたすら絵の世界に没頭していく。そして大典禅師の影響のもと、全ての生きとし生けるものは全て成仏するという仏教の教えを自身の作品をもって後世に伝え残したいという思いから「動植綵絵」の制作にとりかかり、わずか二年後には、十五幅（うち三幅は水墨画）を完成させるのである。この後、大典禅師の知遇を得て、弟（日歳）の死を契機とし、「釈迦三尊像」とその周囲を飾るための莊嚴画として「動植綵絵」三十幅を、両親と弟、更に自分自身の永代供養を願って相国寺に寄進することになる。

そして一七七〇年（明和七年）、若冲は父の三十三回忌にあたり、「釈迦三尊像」と「動植綵絵」三十幅の寄進を完了させている。

次に若冲の寄進した「釈迦三尊像」について簡単に説明させていただきたい。三幅の中央に仏教の開祖である釈迦如来、右幅に仏の知恵の象徴である文殊菩薩、左幅に仏の行徳を表す普賢菩薩がそれぞれ描かれている。本図は、東福寺に伝来していた張思恭筆と伝えられる「釈迦三尊像」を見た若冲が、寄進状によるところでは「巧妙比ぶる無く心に模倣せんことを要め」て模写したとされている。なお、ご参考までに現在、伝張思恭本「釈迦三尊像」は「釈迦如来像」が米国クリーブランド美術館に、「文殊・普賢菩薩像」は東京の静嘉堂文庫美術館にそれぞれ所蔵されている。

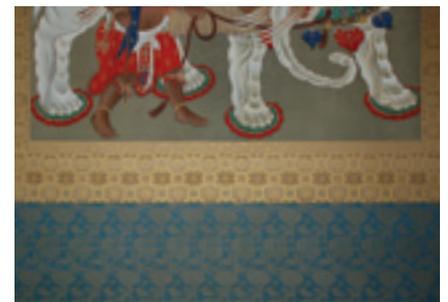
さて、話を表具に戻したい。修理を承った際の表具は寄進当時のものであったことは既に述べたが、表装形態・表装裂地については次のとおりである。まず三幅共通の一文字裂は足利義政



「釈迦如来像」(中央)



小牡丹唐草文様正絹本金襴(一文字)



「普賢菩薩像」



桐唐草模様正絹本金襴(「釈迦如来像」中廻し)



桃梨華枇杷文様正絹緞子(外廻し・上下)



本金鍍箔雲縁取り華文・龍文入り正絹本金襴
(「文殊菩薩像」「普賢菩薩像」中廻し)

(一四三六〜一四九〇)が能阿弥(一三九七〜一四七一)に命じて玉潤の「瀟湘八景図」卷子を掛軸に改装させた際に用いた一重蔓の小牡丹に宝尽紋を散らした図柄を模しながらも、宝尽紋を取り除いた図柄の金襴を使用している。次に中央「釈迦如来像」の中廻し裂は相国寺の紋である桐を取り入れている。更に両端の「文殊菩薩像」と「普賢菩薩像」の中廻し裂についても、これは由来の詳細については確認中だが、亀甲柄木瓜雲縁取り華文・龍文の上に金糸で縫った跡が見られる三十二菊の金襴であり、こちらもお寺と天皇家を繋ぐゆかりの深いと思われる図案が用いられている。

しかしながら、中央「釈迦如来像」の外廻し裂と両端「文殊菩薩像」と「普賢菩薩像」の上下裂については少し趣きを異にしている。まず、二種の花を文柄に用い、枇杷の枝葉とその二種の花をつなぐ独特の模様が見られる。この枇杷の枝は若冲の「葉中譜」で描かれた枇杷の枝で、花の一つはやはり若冲の「玄圃瑤華」中の梨の花、二つ目の花は若冲の作品から動植綵絵「桃花小禽図」の桃の花と見ることができ、これらは若冲自身が自ら生み出した文様であると思われる。表装の中心となる重要な部分、本紙を囲む一文字・中廻しには中尊表装であることを尊重し、相国寺やその塔頭につながるの深い文様の裂地を用いているが、一文字・中廻しの外側に接する外廻しや上下の裂地において、三つの果物の花からなる図案を取り入れ文様を製作したことは、若冲の実家が青物問屋(錦小路)ということからみても大変興味深い。さらに、三幅共通の一文字裂についても、足利時代の図柄を模しながらも、宝尽紋を取り除いた図柄を使用した背景については、そもそもこの三幅対の寄進には家族の追悼を願う意味あいも含まれていることから敢えて、吉祥を表す紋をはずしたとも推測できなくはないだろうか。こうしてみると、若冲の意向を表具にも色濃く反映させたのではないかと思えてくる。

こうしてみると、表装の裂地の製作あるいは選定に若冲が深く関わっていた、つまり若冲自身も表装裂地に関する造詣が相当深かったことを伺い知ることができる。

若冲は相国寺の歴史を調べ、表具の形式や裂地についての知識を身につけ、その意味する所を考慮した模様を考案し、色合いの調整まで手がけていたとすれば、本紙の絵画を描くことのみにとどまらず、表具全体を一つの絵画と見立て、裂地もその絵画の構成要素であると考えていたのではないだろうか。

それならば、これら三幅とあわせて寄進された「動植綵絵」（現在は宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）の表装はどのような裂地であったのか非常に興味を湧くところであるが、現在の表装裂地は、大正時代の修理時に取り替えられたもので残念ながら寄進当時のものではないが、それ以前は「中浅黄緞子、天地茶色絹、軸紫檀」という記録が残っている。余談だが、「動植綵絵」は明治期の廃仏毀釈の混乱の中、数奇な運命をたどり、明治二十二年に宮内庁に献納され、その下賜金によって相国寺は復興したといわれている。

更に、若冲の関心は表具裂地の選定や図案の考案という枠から飛び出し、裂地を織り出す製作段階まで向けられ、そこから新たな作品の着想を得ていたとも考えられる事例がある。若冲の作品の中でも特に独創的な作品に「白象群獣図」「樹花鳥獣図屏風」「鳥獣花木図屏風」という柀目絵があるが、この柀目あるいは方眼の大きさが西陣織の下絵である「正絵」「紋図」設計図ともいわれるもの（の方眼と共通すること）を、金沢市立芸術大学『芸術学学報』6にて泉美穂先生が指摘されている。このことは、若冲は自らの原画を裂地の設計図として裂を製作するにあたって、「正絵」下絵の際に方眼紙の中に絵具を塗りつぶして紋型の下地を製作し、裂地を織る紋型が出来る工程を実際に目にしていたことを容易に想像させてくれる。

若冲は寛政十二年（一八〇〇）九月十日に八十五歳で逝去しているが、相国寺は塔頭、鹿苑院において四十九日法要を行っており、この際、金田忠兵衛という西陣の織商を招いているという記録が「参観寮日記」に残っている。若冲と西陣織との密接な繋がりをうかがわせる。

ちなみに、この法要では、その場に「釈迦三尊像」と「動植綵絵」を掛け並べて行われ、翌年に没することとなる大典禪師が導師を務めている。

若冲の死後、「釈迦三尊像」と「動植綵絵」は、相国寺の「観音懺法」の儀式の際に用いられ、現在は「白衣観音像（明兆作）」と若冲の「普賢菩薩像」「文殊菩薩像」の掛軸が毎年掛けられている。まさに若冲の願わんとしていたことである。

これらが、今後も更に後世に引き継がれていくことが、微力ながら若冲の作品の修理に携わった者の願いである。

また、こうして表具を通して、絵師としての技量ばかりか絵画からその表具に用いる裂地に至るまで、隅々にまで心を配りながら作品を完成させた若冲という天才の奥深さに触れ、改めてその飽くなき探究心と情熱に敬意を表さずにはいられない。同時に、日本の風土の中で先人達が発展させてきた表具という文化を、若い世代の人達にも今一度、広く関心を持ってもらいたいと切に願う。

先ごろ複製画「釈迦三尊像」三幅対が完成し、納品に伺ったのであるが、偶然にも其の日が若冲の命日であったことが何とも不思議で、若冲翁の心に尊かれた思いがしてならないのである。

京の和菓子屋 美祥館のおかみたち

演劇塾 長田学舎 栗津もと

「おめでとうさんどす。今年もどうぞよろしゅうおたの申します。今年もきばりまひよなあ。」

私の家の元旦は、家族揃うてこの挨拶から新年が始まります。

お祖父ちゃんはずでに亡くなっています。今も元気で若々しいお祖母ちゃんと両親、そして二人の姉と私の合計六人が、お座敷で一寸緊張気味の顔で挨拶をします。それからそれぞれが今年一年の心がまえをいいます。私は小学生の頃、その時が来るまですっかり忘れていて、あわてて思いついた事をいうて、「そんなことほんまにできますのか」とか、「出来ませんことわんときよし」などとよくいわれました。けど、今はもう大丈夫です。バッチリいえますし、発表した事は殆どがんばって実行しています。なにしろ二人のお姉ちゃんはきついし、うるさいし、こわいですから、自分で考えて、実行するていうた事が出来てへんかったら、ものすごいうて来ます。ほんまに機関銃の弾丸みたいに飛んでくるのです。けど、それは私への愛の鞭やと思て有難くいただく事になっています。

家族全員が一年の心がまえをいうた後、いよいよお祝いをするのですが、先ず最初にいただくのがお薄で、お祖母ちゃんが作った蕨餅です。「へえ、お祖母ちゃんが蕨餅を作らはるの」と一寸びっくりされるかも知れませんが、お祖母ちゃんは菓子職人なんです。

あ、まだ挨拶をしませんでしたね。失礼しました。私は川北鈴音といいます。年は十五才、高校一年生です。家は和菓子と洋菓子を作って売っています。店の屋号は「一条宣寿美祥館」——一寸仰々しい名前ですけど、お祖父ちゃんのお祖父さん

が、明治四十四年に和菓子屋を始める時、修業した店の師匠がつけてくれたはったんやそうです。この美祥館は私の父で四代目です。お祖母ちゃんは三代目であるお祖父ちゃんの奥さんです。

お祖母ちゃんが私たちにこういうのが『京都は平安時代からの都やさかい、お菓子屋さんも室町時代からとか、江戸時代から続いている伝統のある立派なお店が沢山あります。うちはそのなお店とは比べもんにならない、小さい小さい、高々百年足らずの店です。それこそ吹いたら飛んでしまうような店です。それがここまで続いて来たのは、代々の当主とそこのおかみさんが一生懸命きばって来てとくれやしたからです。季節のお菓子、歳時のお菓子は他所よそさんがお作りやすのとは「一と味ちがうもの」をと考えて作つとくれやした。兎に角美祥館を絶対に潰さんようにと、必死で守つて来てとくれやした。お客さんに召し上がっていたくお菓子は「一つ一つ丁寧

に心を込めて作ること」「目で楽しみ、口に入れて幸せに思うていただくお菓子を「作ること」と、一にも二にも三にもお客さんを大切にすることを教えてくれはったん

です。それを私は受けついできたんです』。

おわかりのようにお祖母ちゃんはきれいな京ことばでしゃべります。けど、京都で生まれ育つた京都人ではありません。東京は神田の本屋さんに生まれた生粋の江戸っ子です。それが京都の和菓子屋の嫁になったんです。お祖母ちゃんがある雑誌の「女人菓子職人」でこんなお話をしました――。

『私は東京の大学で主人と出会おうたんです。デザインを専攻してました。主人も同じやったんです。主人は京都から出て来て、家は和菓子屋やいうてました。なる程、言葉づかいも立居振る舞いもおっとりしてて、気働きがゆきとどいて丁寧で、十九や二十才の若者とは思えん、よう出来た人どした。』この人、ようしつけられるなあ。先祖はお公家さんかな――私は興味をもっているいろいろと想像してたのしんでました。

ところがひよんな事で、京都の和菓子屋の嫁になつてもたんです。娘時代に憧れてた出版社で編集の仕事をする夢も、生まれ育つた東京までも捨てて、主人と一緒になつたんです。そのきっかけはお姑かあさんです。主人たち子供を育てて、この美祥館を守つとおいでやしたお姑さんに惹かれてしもたんです。

あれは大学卒業前の最後の夏休みどした。一人でふらつと京都へ旅行したんです。ほして東京へ帰る日、主人の店へ寄つてみようかなと思つて、何も知らさんとたずねてみました。鴨川のすぐ西側で、丸太町から一寸上つた、今と同じこの場所どす。

よう手入れた丈の低い生け垣の中に、床几が何脚か置いてあつて、その奥にある店構えは東屋風の素朴な感じどした。今も同じどすやろ。昔のままで来ましたんどうすえ。

床几に腰をおろすと、東山が比叡山からずうつと南の稲荷山まで望めて、目の下には鴨川が流れていて、ほつと安らぎをおぼえました。「山紫水明の地」と、頼山陽さんが称えはつた言葉をしみじみ実感しましたなあ。

「おいでやす」――苖のある、よう通る声に振り返ると、藍色の緞織じゆんおしのお単衣を涼しそうに着た、五十前後の女の人が、人懐っこい笑顔で立つといやしたんどうす。ほしてよう冷えた麦茶を出したら「暑おしたやろ、どうぞ上つとくれやす」とやさし

い言葉でいうとくれやしたんです。——お母さんだ——私は直感しました。

その時、主人が表から入って来たんです。主人は私を見て、鳩が豆鉄砲におうたよ
うな顔をしました。自転車で配達に行ってきたんです。ものすごい汗が吹き出るやら、
流れるやらでそらひどい顔をしてました。と、お母さんの声が飛んで来たんです。
「友幸さん、お客さんのおいやす前へ、汗だらけの格好はあきまへんやろ。表から入
って来るのとちがいます。顔も手も洗うて、シャツも着がえてから出て来るのが礼儀
どす。早う着がえといでやす」——主人は肩をすくめて照れ笑いをしながら「はい
はい」いうたんです。そしたら又飛んで来ました「重ね返事はあきまへん」——。

私は初めてほんまの京女を見たんです。子供を持つ母親の姿を見たんです。商い
をする店のおかみの心意気を識ったんです。私はこの人をもっともっと見ていたい、
深うふこう知りたいと思たんです。ほしてとうとう京都へ来て、川北の家の嫁にな
り、美祥館の三代目のおかみになってしまいました。

お姑さんは美祥館の二代目のおかみとして、それは言葉ではいづくせん苦労を
重ねて来やりました。その一番大きな事が主人である二代目、私にはお舅さんとど
す。その二代目が、第二次世界大戦で大怪我をして復員して来やはった事どす。脊
椎に大砲の弾丸の破片が突き刺さって手が動かかんようにならはったんです。

お舅さんはそれはそれは素晴らしいお菓子作りの名人やったそうどす。特に紫陽
花のお菓子は有名で、右に出る人はなかつたそうどす。お姑さんが「お父さんの指先
は魔術師みたいに踊るように動いてお菓子が作り出されていったんですえ」てようい
うといやした。ほして「お父さんにもう一ぺん紫陽花のお菓子を作らしてあげたい。

何とか指がもとのように動かせるようになってほしい」と念じ続けといやしたんです。
それが、又、ひよんな事から、私らが作らしてもらう事になったんです。私は結婚し
てから五年程かかつて、美祥館の全部のお菓子の作り方を、帳面にわかりやすう書い
てたんです。それを見て「お前に作らそう」という事になって、お舅さんから直々紫陽
花はもちろん、他のお菓子も次々と教えていただき、受けつぐ事になったんです。

お祖母ちゃんがお正月の蕨餅を作らはるのがおわかりにならはったでしょう。お





祖母ちゃんのお菓子作りはひいお祖父ちゃんに負けんくらい上手やそうです。私はお祖母ちゃんも大変な苦勞をして来やはったと思えます。京都の和菓子屋のおかみとして、他人から絶対に嘲笑わらわれんように京ことばを徹底的にたたき込まれました。そして毎日のくらしの中のならわしから料理にいたるまで、あの厳しいひいお祖母ちゃんにすごかれはったんですから。今や立派な京女やと思います。そして私の母、四代目のおかみを育ててくれます。母はパティシエの資格を持って、お祖父ちゃんが作らした洋菓子のお店でがんばってます。お父さんは目下、お祖母ちゃんの下で和菓子作りの修業中です。

さて、五代目は一体誰が継ぐのか——。私たち三人姉妹の中で、それとなくさぐり合いをしています。ただいえる事は、三人とも美祥館が大好きです。

(これは、来る六月十一日、十二日に塾創立六十周年記念として上演する「通りゃんせ」のこぼれ話です)

特別寄稿



第三十回寺院婦人会研修会に参加して

第四教区 海岸寺 石崎典子

この度は、寺院婦人会第三十回記念としまして、いつもとはまた違った遠隔地への旅を計画して頂き、誠に有難うございました。日頃なかなか行くことのできない九州地方です。回らせて頂いた名所は、ほんの一瞬を垣間見ただけですが「神仏とその地に住む人が、自然と一緒に暮らしているなあ」と、素朴で心地よい感じのする土地でした。

開会式会場として訪れました日田市の岳林寺は、有馬管長猥下が御幼少時代、十年以上修行されたお寺ということで、当時の生活をなんとも楽しくお話し下さいましたが、きつと想像を絶する過酷な日々だったと存じます。親が一番恋しい頃に離れて、厳しい師匠にすごかれ、寂しく辛い思いをされたこともありましよう。しかし苦難を乗り越え、管長猥下となられて今日、様々に活躍です。今こうして私も御縁があつてここにいる、とても不思議な感じが致します。

そして拝見した数々の重要文化財や史跡は歴史を感じ、とても貴重なものばかりでした。その中で「ノミと槌だけで三十年かけて掘り抜いた」といわれ

る中津市の「青の洞門」をくぐってみて、やり抜いた禅和尚の信念の強さに驚きます。全長約三百四十メートルほどもあるそのトンネルを私たちが歩いた当日は風も強く寒い日だったので、これ以上に寒い季節の日にもくじけず掘ったのだろうか、と考えると、本当に頭の下がる思いです。

「宇佐神宮」におきましては、全国の八幡宮の総本宮で、最奥の上宮まで長い参道を歩き、参拝の形式は、二礼四拍手一拝。初めてやってみました。いつもより丁寧にお参りができた感じがします。御殿の朱色が鮮やかに、美しいお宮さんでした。

最後に、寺院としてこの研修会に参加させて頂くようになってから、ずっとお世話になって参りました。教習部の和尚様方には心より感謝申し上げます。毎回細やかな配慮で親切に接して下さい、安心して参加することができました。今期でお役目が変わられるとのこと、次回の研修会からはお会いできないのが寂しくもありますが、今後は教わったことを忘れず、精進して参りたいと思います。

合掌

○知床三堂法要

六月二十七日、北海道斜里町知床知布泊村において、毘沙門堂・太子堂・観音堂法要が厳修され、有馬管長、山木鹿苑寺執事長、小出慈照寺執事、矢野教育学部員が出頭した。今年はこの法要開催の中心的存在であった作家の立松和平氏が急逝され、追悼と立松氏が長年平和祈願と知床の自然保護に尽力されてこられたことに對する感謝の念もあり、例年にも増して多くの参拝があった。有馬管長は法要後の法話で立松氏の遺志を我々宗教家や知床の人々、ここに集う全国各地の皆で継いでいかなければならないと語った。その後現地の方々と恒例の懇親会があった。二十八日は早朝より知床半島の番屋まで出向き、漁師の方々と共に恒例の航海安全祈願法要を行った。

○暁天講座

八月二日、三日の二日間方丈において恒例の暁天講座が室町市政協力委員会との共催により開催された。午前五時半より六時まで坐禅、その後法話。そして大書院にて粥が振舞われ七時に解散となった。本年の講



師は二日が有馬頼底管長で演題は「是心」、三日が花園大学文学部日本史学科准教授松田隆行氏で「幕末の動乱と京都」であった。両日で延べ二百人を超える参加者があった。



○方丈屋根葺き替え工事起工式

九月一日、方丈屋根の葺き替えにあたり管長猊下を導師に一山出頭のもと起工式が行われた。今回は約五十年振りの工事となり、工期は約三年の予定である。この間方丈の拝観は休止（開山堂を代替）となる他、本



山諸行事においても色々と支障がでてくることが予想される。工期の間は工事状況に応じた対応を迫られることになるが、本派寺院、檀信徒のご理解を何卒お願いしたい。

○上海玉佛寺友好表敬訪問

九月十三〜十五日、管長を団長に一行十二名が上海玉佛寺を表敬訪問した。今回は玉佛寺(覺醒住職)の招待に応じたもので、久しぶりに会った管長と覺醒住職は互いの旧交を温め合い、随行員一同も玉佛寺尊宿方と親交を深めた。今回は管長著書二冊の中国語版を中国仏教協会が出版することになり、その記念式典や管長の記念講演も行われ、関係者や玉佛寺の信徒など約二百五十名が出席した。また玉佛寺内の禪堂においては江上宗務総長の法話があり、訪中団一行や玉佛寺の尊宿多数が禪堂内で拝聴した。法話の後は日中そろって坐禅や経行を行い、出席した訪中団在家団員にとっても貴重な体験となった。翌日は玉佛寺の案内のもと上海万博会場を訪れ、中国館や日本館など、特別な配慮のもと見学し、上海博物館にも足を延ばした。尚、訪中団の中より荒木元悦光源院住職と澤宗泰林光院住職は十四日早朝より、管長親書を携え開封市大相国寺(釋心廣住職)を訪問し、同寺へ梵鐘寄進のお礼を述べ、当時本山で計画中の鐘楼建設について説明をした。翌十

五日訪中団一行は、玉佛寺班と大相国寺班が上海、北京からそれぞれ無事帰国した。

管長著書中国語版と団員名簿は左記の如し。

中国語版「禅林夜話」劉建訊 北京宗教文化出版社出版
「大道說法」劉建訊 北京宗教文化出版社出版

参加者名簿

有馬頼底管長 江上泰山宗務総長
荒木元悦光源院住職 松本憲融光明寺住職
澤宗泰林光院住職 牛江宗道竹林寺住職
小出量堂桂徳院住職 矢野謙堂大光明寺住職
大塚月潭法雲寺住職 久山弘祐大應寺住職
小村谷文子承天閣美術館事務局次長 福知説子
(関連写真は巻末カラー参照)

○臨黄總會・布教団理事会

九月十六日、妙心寺花園会館において臨黄合議所総会と布教団理事会が開催され、江上宗務総長、佐分教学部長、澤財務部長がそれぞれ出席した。合議所総会では臨黄専門道場補佐委員会議、第七回臨黄教化研究会、臨濟禪師・白隠禪師遠諱事業について協議があり、布教団理事会では二十一年度の決算・事業報告と二十二年度の予算と事業計画が審議され承認された。

○東京椿山荘内三重之塔解体修理起工式

九月十七日、東京椿山荘(藤田觀光株式会社所有)内にある三重之塔解体修理起工式が厳修された。この塔は室町時代末期の創建と推定され、もとは歌人として名高い小野篁ゆかりの竹林寺(広島県)にあった。大正十四年に藤田平太郎男爵が譲り受け、椿山荘に移築したものである。今回藤田家と縁故である管長に法要の導師をとの依頼があった。当日は管長はじめ江上総長、山木鹿苑寺執事長、平塚慈照寺執事長、他一山若手の和尚が出頭した。法要後は場所を椿山荘内の宴会場に移し、記念式典が行われた。解体修理は来年には落慶の予定で、その折はまた一山出仕による観音菩薩木像の開眼法要が行われることになっている。

起工式の香語は左の如し。

香語

楼閣重々聳苑中 楼閣重々として、苑中に聳える
太平洪業起清風 太平の洪業、清風を起こす
工夫一片無多子 工夫一片、多子無し
刹々塵々信願功 刹々塵々、信願の功

○鐘楼地鎮起工式

九月二十一日、鐘楼の地鎮起工式が厳修された。これについては去る三年前、寺院婦人中国研修の折に相国



地である法堂西側の鎮守八幡神社北側の空き地において、管長導師に一山出仕のもと諷経がなされた。

○第八回管長御親教

九月二十七、二十八日、平成二十二年度管長御親教が行われた。本年より第五教区(藤岡牧雄支所長)となり、二十七日に保寿寺(藤岡牧雄住職)、西光寺(三浦隆心住職)、長嚴寺(加藤文保兼務住職)、二十八日に増光寺(藤岡牧雄兼務住職)、富田寺(加藤文保住職)、本誓寺(延本輝典住職)の六ヶ寺を回り、江上宗務総長、佐分教学部長、矢野教学部員、荒木教学部員が同行した。

(詳細は巻頭カラー参照)

○慈照寺総合落慶法要

十月十六日、慈照寺(平塚景堂執事長)において、観音殿・東求堂・方丈・中門修復並びに研修道場・売店圓通殿・東司新築工事が七年にも及ぶ工期を経て完了したのを祝し、総合落慶法要が厳修された。当日は秋晴れのもと管長を導師に頼光室老大師はじめ江上宗務総長他一山全員が出頭し、来賓として国泰寺派管長虚室老大師、聖護院門跡宮城泰年管長猥下、教王護国寺森泰長執事長、京都仏教会長沢香静事務局長、在京都フランス領事館フリーツプ・ジャンヴィエ・カミヤマ総領事等が出頭され、また有縁の在家約二百名が参列した。

法要に先立ち、同寺華務佐野珠寶氏による献花があり、続いて香道志野流家元峰谷宗玄宗匠による献香があった。法要後は場所をブライトンホテルに移して祝齋が盛大に行われた。(巻末カラー、80、81ページ参照)

管長祝語は左の如し。

祝語

如意峰邊 艸木繁 如意峰邊、艸木繁し
諸堂解放 願王尊 諸堂解放、王尊を願う
青天白日 幽窓下 青天白日、幽窓の下
千古法灯 喜永存 千古法灯、永存を喜ぶ
大龍叟

※如意峰邊 慈照寺裏手にある如意ヶ岳のこと
大文字送り火で有名

○開山忌

開山夢窓国師の毎歳忌法要が十月二十日宿忌、二十一日半齋の両日にわたり厳修され、一教区大光明寺(矢野謙堂住職)より百五名、四教区より百三十三名(寺院九名)の団参があった。二十一日九時より法堂において頼光室老大師導師のもと猥粥諷経にはじまり、諸堂焼香、奠供十八拜が行われ、引き続き檀信徒、本派寺院の順に入堂し、管長猥下導師のもと出班焼香に引き続き楞嚴行導が厳修された。

管長猥下香語は左の如し。

開山忌毎歳忌香語

満庭秋色日東邊 満庭秋色、日東の邊

素月孤圓耀碧天 素月孤圓、碧天に耀く

沈水一炬無留意 沈水一炬、無限の意

靈源瑩徹本分禪 靈源瑩徹す、本分の禪

定中昭鑑

頼底九拜

○寺院婦人研修会

十月二十五日、二十七日まで第三十回寺院婦人研修会が行われた。本年は第三十回を記念して、管長が小僧時代を過ごした大分県日田市岳林寺(妙心寺派)を訪れ、同寺で研修会開会式を行った。はじめに本尊・開山各諷経の後、佐分教学部長司会のもと管長垂示、総長挨拶、同寺住職瀬川道信和尚の挨拶があった。管長は岳林寺での辛い修行時代に思いをはせ、厳しい中にも慈愛のこもった指導を受けた同寺歴代の森下大拙、石井豊洲両師への感謝の念を改めて述べられ、寺院一同は真剣な眼差しで聞き入っていた。開会式の後には総茶礼となり記念撮影、拝観後同寺を後にした。一行は湯布院で一泊し、翌日は国東半島の富貴寺、真木大堂、宇佐八幡宮、青の洞門等を拝観した。

その後夕刻には博多市内へと場所を移し、修了式の後葉石懇親会となった。明けて三日目は遠方からの参加者にも配慮し齋座後一部現地解散、その他もそれぞれ無事帰山した。今回は各教区より十五名の参加者があった。



岳林寺方丈での開講式

参加者名簿

一教区 荒木寛子(光源院) 澤万里子(林光院)
山木佐恵子(普廣院) 草場容子(慈雲院)
二教区 阪口美幸(無礙光院)
四教区 武田佐智子(長福寺) 本田節子(園松寺)
田中智津子(円福寺) 五十嵐多賀子(善應寺)
石崎典子(海岸寺)
五教区 福場由紀子(萬福寺)

六教区 矢野八恵子(南洲寺) 芝原由紀子(感応寺)
近藤洋子(良福寺) 田中富士子(龍源寺)

○第五教区団参

十月二十八日、第五教区(藤岡牧雄支所長)団参があった。一行は法堂内において佐分教学部長の挨拶を受けた後、堂内を拝観、今期より公開となった開山堂を回り、円山応挙筆「七難七福図」を展覧中の承天閣美術館を見学して無事帰途についた。

○廣護寺和尚遷化

去る十月二十八日、六教区廣護寺井上義堂住職が遷化(世寿六十六)された。師は昭和二十年七月五日佐賀県に生まれた。養賢僧堂、梅林僧堂、相国僧堂で修行した後、昭和五十五年二月二十一日に廣護寺住職に就任した。六教区宗務支所長、宗会議員をそれぞれ三期務め、部内においては布教教化、寺門興隆に熱心に取り組んだ。昨年七月より体調を崩し病氣加療中であった。密葬は十月三十日六教区支所長松本憲融光明寺住職を導師に執り行われ、部内寺院や三教区法雲寺(大塚月潭住職)、福圓寺(大谷昌弘住職)、檀信徒多数が出頭した。津送は十二月十五日江上泰山宗務総長を導師に厳修され、本山より誄が奉読された。

尚、現在廣護寺は井上宗光副住職が法務に就いている。

○第二教区団参

十月二十九日、第七回二教区団参が行われ、二教区支所長牛江宗道竹林寺住職他、久山弘祐大應寺住職、和田賢明是心寺副住職等の引率により三十七名が参加した。大書院で諷経後、佐分教学部長より挨拶があり、その後管長の法話を拝聴した。本山食堂で上幸の精進料理による昼食後、法堂、開山堂、承天閣美術館を特別拝観して無事散会となった。

○玉佛寺より表敬訪問

十月三十一日、上海玉佛寺の覺醒住職他八名が本山を表敬訪問した。一行は仏教大学で開催された第十三回日中仏教学術交流会のため、来日しており、多忙な中本山を訪れ承天閣美術館内夢中庵で、先の相国寺一行



談笑される管長と覺醒住職

玉佛寺訪問以来約二か月振りに管長と対面した。管長は一行を温かく迎え、覺醒住職はじめ全員と親しく話された。その後覺醒住職から管長へ、また本山と承天閣美術館から一行へ記念品の交換があった。一行は抹茶茶礼の後、館内を拝観し、またの再会を約して本山を後にした。

○弘雲仏画の心展開催

平成二十二年十一月十二日から二十三日まで承天閣二階講堂に於いて「日中友好仏教書画・弘雲仏画の心展」が開催され、多数の観覧者で賑わった。本展覧は妙心寺塔頭靈雲院と中国北京靈光寺の姉妹寺院締結五周年を記念したもので、中国の仏画師弘雲氏の釈迦如来像、観音菩薩像、文殊菩薩像等の六十点の仏画が展示された。

初日にはテープカットの後、管長猥下導師のもと靈雲院住職則竹秀南老師、靈光寺住職釈常藏法師以下中国仏教教会の僧侶と一山で、多くの来賓のなか諷経が行われた。その後本山大書院にて靈光寺御一行の表敬訪問を受け、しばし仏教交流の歓談がなされた。

○東京維摩会

東京維摩会は大龍窟管長、韜光室老師とも平成二十二年の坐禅会を全て終了された。来年は左記の日程で開催される。

◆二〇二一年(平成二十三年)東京維摩会日程

管長坐禅会

一月二十二日	二月二十二日	三月十二日
四月九日	五月七日	六月十一日
七月九日	八月休会	九月十日
十月八日	十一月十二日	十二月十日

以上一月は第四土曜、五月は第一土曜、あとは第二土曜。但し八月は休会

時間：午前十時半より正午頃迄
内容：「寒山詩」提唱、坐禅、茶礼
威儀：坐禅の組みやすいゆったりした服装が好ましい。

老師坐禅会

一月二十九日	二月二十六日	三月二十六日
四月十六日	五月二十八日	六月二十五日
七月十六日	八月二十日	九月三日
十月十五日	十一月十九日	十二月十七日

以上四、七、八、十、十二月は第三土曜、
二、三、五、六月は第四土曜、

が成立し、来年四月の春休みに、第四教区若狭相国会の子供たちといっしょに研修を実施することを決めた。懇親会では、精進料理を楽しみながら、歓談の花を開かせた。午後一時前に散会した。

○本山団体参拝

十月二十九日
(金)午前十一時より第七回二教区本山団体参拝が三十七名の出席を得て行われた。まず、大書院にて佐分宗順教学部長導師のもと、全員で般若心経一卷を誦した。そして、管長猊下より御法話を賜り、昼食を挿んで、法堂・開山堂・承天閣美術館を拝観して、午後三時前に下山した。



第四教区

七月十二日 高浜地区住職 お盆行事調整会(於・善

應寺)

八月二日 宗務支所 支所会(於・善應寺)

お盆行事調整及び本山開山忌団参について協議

九月九日 寺庭婦人会 奉仕作業

(於・特別養護老人ホーム楊梅苑)

九月二十七日 宗務支所 支所会(於・善應寺)

新任職の拝請について及び本山開山忌団参について協議

十月二十一日 宗務支所 開山毎歳忌団参

相国会会員、住職、総勢一三〇名が参拝。

本山法要参拝後、奈良に移動。薬師寺、唐招提寺を拝観。

十月二十五～二十七日

寺庭婦人会 第三十回本派寺庭婦人研修会
教区より寺庭五名が参加。

第五教区

○秋の叙勲

保寿寺閑栖和尚藤岡大拙師が瑞宝中綬章を受章された。地元の教育、文化に多大の功勞。お祝い申し上げます。

○出雲相国会夏休み坐禅会

七月二十七日に恒例の「夏休み親子坐禅会」を西光寺で開催した。子供三十六名、大人十五名、役員合わせて六十名以上が参加。西光院新命和尚、東光寺新命和尚の指導で坐禅。坐禅終了後、坐禅和讃を唱和し休憩後、今回は地元の手品愛好家の手品を楽しんだ。

精進料理

う え
こ っ

〒604-1835
京都市中京区大宮通錦上ル
電話〇七五八二一一三八七二

大切な文化財を始め、建物の安全と安心の為努力しています

電気設備工事・消防設備工事

ADACHI 足立電気工業株式会社

〒601-8045
京都市南区東九条西明田町34-21
TEL 075-681-4461 FAX 075-681-9767
E-mail: adachi-d@guitar.ocn.ne.jp

<p>大本山相国寺御用達 御法衣・仏具 (株)後藤利法衣店</p> <p>〒604-8273 京都市中京区西洞院通三条上ル 電話(075)221-4587 FAX(075)223-0094 フリーダイヤル(0120)014587</p>	<p>臨濟宗御法衣調達 大本山相国寺御用達 湯浅法衣店</p> <p>〒606-0905 京都市左京区松ヶ崎杉ヶ海道町5-24 電話(075)705-2772 FAX(075)705-2773</p>
<p>大本山相国寺御用達 庭園 設計・施工 樋口造園(株)</p> <p>〒602-8341 京・上京区七本松通中立売下ル 電話(075)462-1385 FAX(075)464-6120</p>	<p>大本山相国寺御用達 精進料理 矢尾治</p> <p>〒600-8486 京都市下京区高辻堀川町358 電話(075)841-2144 FAX(075)841-2110 http://kyoto-shoujinryouri-yaoji.homepage.jp</p>
<p>總本山御用達 藤安田念珠店</p> <p>本店・〒604-8072 京都市中京区寺町六角角 電話(075)221-3735(代表) 東京・札幌・福岡 各営業所</p>	<p>文化財堂宇修復保存 大本山相国寺御用達 社寺建築 設計・施工 数寄屋建築 澤甚株式会社 澤野工務店 SAWANO</p> <p>本社 〒605-0069 京都市東山区東大路通知恩院前上ル2筋目東入 TEL(075)561-5394(代) FAX(075)533-3775</p> <p>山科事務所・工房 〒607-8126 京都市山科区大塚元屋敷町62 TEL(075)541-1257(F)</p>
<p>貴重な御法衣の御用は 大本山相国寺御用達 後藤新助法衣仏具店</p> <p>〒616-8041 京都市右京区花園寺ノ前町30番地 電話(代表)(075)462-3915番 ファクシミリ(075)462-3616番 URL http://www.rinzai.jp E-mail: rinzai@rmail.plala.or.jp</p>	<p>大本山相国寺御用達 社寺建築 (株)北村誠工務店</p> <p>〒603-8225 京都市北区紫野南船岡東町45 電話京都(075)441-0563 FAX京都(075)441-0571</p>



● 編集後記 ●

皆様、明けましておめでとうございます。本年も宜しく願い申し上げます。第3次江上内局はこの3月を持って次の内局に引き継ぐこととなります。3期9年の長きにわたり、皆様のご協力とご法愛をいただきありがとうございました。これからも引き続き相国寺発展のためにご協力頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

四教区鈴木元拙師のパキスタン仏教遺跡紀行文の続きは都合により割愛させて頂きました。

現在、相国寺本山では伊藤若冲の動植綵絵の複製画の作成が進められていますが、その表具を担当していただいている浩悦庵の矢口恵三氏から、若冲と表具についての興味深い原稿をご寄稿いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

昨年9月より方丈の修理が始まりました。約3年間の工事期間ですが、皆様にはご不便をおかけすることになると思いますが、ご理解いただき、ご協力いただきますよう宜しくお願いいたします。(佐分 記)

平成23年1月1日

発行所/大本山相国寺・相国会本部

〒602-0898 京都市上京区今出川通烏丸東入相国寺門前町701 TEL075-231-0301 FAX075-212-3591
URL <http://www.shokoku-ji.or.jp> E-mail kyogaku@shokoku-ji.or.jp (教学部)

なが——い、おつきあい。

貯める、運用する、借り入れる、積み立てる、備える、管理する…
京都銀行は、人生のさまざまなシーンで皆様を応援します。お気軽にご相談ください。

飾らない銀行

 **京都銀行**
<http://www.kyotobank.co.jp/>

あなたの、豊かな
人生のために。

三菱UFJ信託銀行のライフプラン・コンサルティング

三菱UFJ信託銀行は資金運用をはじめとする、
資産全般にわたる運用のご相談を承ります。

資金の運用

不動産のご相談

資産の管理・承継

 **三菱UFJ信託銀行 京都支店**

〒600-8006
京都府京都市下京区四条通高倉東入立売中之町85

TEL.075-211-7161

届出第6号 (社)不動産協会会員 (社)不動産流通経営協会会員
(社)首都圏不動産公正取引協議会加盟

電話受付/平日9:00~17:00(土・日・祝日等を除く)



社寺庭園・町屋庭園・露地庭
作庭 管理

 **長岡造園**

〒616-8305 京都市右京区嵯峨広沢御所ノ内町13-3
電話 (075) 872-0005 FAX (075) 872-0004

印刷を極め、印刷を超える——

生産力と機動力、開発力と発想力をもって
「新しい社会に貢献する企業」を目指します。



情報セキュリティマネジメントシステム
ISO27001:2005

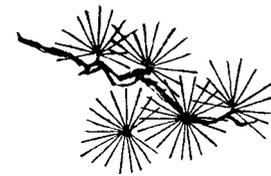


日本水なし印刷協会
認可工場(環境保全対策)

 **ヨシダ印刷株式会社 京滋営業所**

〒604-8277 京都市中京区西洞院通り御池下ル三坊西洞院町572-4 NOA高松殿ビル6階 TEL.075-252-5421
[本社]金沢 [支店・営業所・工場]東京・金沢・大阪・富山・福井・京都・静岡 URL <http://www.yoshida-p.jp/>

www.shoyeido.co.jp



香



大本山相国寺御用達

香老舗 **松 崇 堂**

京都本社/京都市中京区烏丸通二条上ル東側 〒604-0857 TEL 075(212)5590
東京支店/東京都中央区日本橋人形町2-12-2 〒103-0013 TEL 03(3664)2307
札幌支店/札幌市中央区南8条西12丁目3-6 〒064-0808 TEL 011(561)2307

京都本店 産寧坂店・銀座店 人形町店 青山香房・札幌店



先人たちの賜物を伝えていく仕事。

デジタル再製画「伝匠美」 www.dnp.co.jp/denshoubi/

DNP

大日本印刷株式会社 www.dnp.co.jp

御法衣・御袈裟・御水引・戸帳・打敷
華蔓・御晋山式用品一式・稚児装束

各大本山御用達

橘兵 草木兵助商店

〒604-0024 京都市中京区衣ノ棚通御池上ル西側
電話 (075) 221-0934 番 振替京都 01090-4-3476

抹茶

全国並びに関西茶品評会 第一位
自園茶 農林水産大臣賞 29 回受賞

有馬頼底管長御好

御濃茶 萬年乃四季

御薄茶 常光



大本山相国寺御用達

宇治 久小山園

〈宇治茶製造販売〉

本社 京都府宇治市小倉町寺内 86

伊勢丹店 (0774) 20・0909

西洞院店 ジェイアール京都伊勢丹 B1

茶房「元庵」も取り扱い

<http://www.marukyu-kojyamaen.co.jp>

大本山相国寺御用達

京表具

絵画・墨跡・織物・修理・一般表具一式
宗紋襖紙・御殿引手 発売元

こう えつ あん
浩 悦 庵

古文化財保存修理研究所
矢口浩悦庵

本社・工房 〒602-8025 京都市上京区衣棚通り丸太町上る今葉屋町 318
TEL (075) 254-6021 (代)・FAX (075) 254-6022
東京営業所 〒203-0014 東京都東久留米市東本町 9-9 TEL・FAX (0424) 72-6239

<http://www.koetsuan.com> E-mail: office@koetsuan.com

Your Global Lifestyle Partner
～お客様の感動を創造します～

国内旅行

宇宙旅行

JTB

海外旅行

大会幹旋

JTB西日本団体旅行京都支店

〒604-8152 京都市中京区烏丸通錦小路上ル手洗水町 670 京都フクトクビル 5 階
TEL:075(241)0139 FAX:075(255)6564
(営業時間 9:30～17:30/土・日・祝日休業)



二条城のほとりに
寛ぎがある

 京都全日空ホテル

〒604-0055 京都市中京区堀川通二条城前
ご予約、お問い合わせは (075) 231-1155
<http://www.ana-hkyoto.com>

教化活動委員会活動報告

教化活動委員会委員長 佐分宗順

◆相国寺史編纂室開設

教化活動委員会は、相国寺本山の一機関として平成十一年に発足し、現代問題を扱った研究会や相国寺研究、ホームページの運営等の活動を行ってきましたが、平成二十二年十月から新たにこの委員会の中に相国寺史編纂室を開設し、本格的に寺史の編纂に取り組むことになりました。

これまで『相国寺史料』全十巻、『西笑和尚文案』等が刊行されてきましたが、二〇〇二年から二〇〇六年にかけて原田正俊氏、伊藤真昭師のご協力を得て、本山蔵、倉庫の古文書類や、塔頭寺院の文書の調査をすすめ、二〇〇七年からは、段ボール箱一六〇箱、約七五〇〇点に及ぶ史料の本格的な整理のため、大谷大学の博物館に寄託して、原田、伊藤両先生を中心に整理を進めてきました。

ようやく整理のめどがついてきたのを機に、今後は相国寺史編纂室において、これまでの成果を基に寺史の刊行を目指します。相国寺史編纂委員として原田正俊氏、伊藤真昭師のお二人にご就任いただき、編纂室常駐の연구원として昨年十一月から藤田和敏氏が就任、本年二月から中井裕子氏が就任の予定です。お二人は原田氏の下でこれまで相国寺文書の整理に当たって頂いていました。略歴は次の通りです。



玉佛寺大雄寶殿

中国玉佛寺、 大相国寺訪問

平成二十二年九月十三日～十五日

●藤田和敏氏

- 一九七二年 生
- 一九九六年 立命館大学文学部史学科卒業
- 一九九八年 京都府立大学大学院文学研究科修士課程終了
- 二〇〇五年 京都府立大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学
- 二〇〇六年 京都府立大学博士(歴史学)

●中井裕子氏

- 一九七七年 生
- 二〇〇〇年 奈良大学文学部史学科卒業
- 二〇〇五年 関西大学大学院博士課程後期課程文学研究科史学専攻単位取得

相国寺の歴史的、思想的、文化史的な位置づけを明らかにし、先人の歩みに学び、これからの相国寺の発展に寄与することができればと考えます。又、最新の学会の研究成果を反映した、宗門に限らず、広く一般の研究者、市民、知識人、学生諸氏にもわかりやすく学べる寺史にしたいと考えています。

当面の構想としては、相国寺創建から現在に至るまでの史料を集めた「資料編」三巻、「通史」一巻を予定し、同時に「参観寮日記」等の日記類の刊行を進めていく予定です。又、研究成果を基にこれまでの相国寺研究の一部として研修会も開いてゆきたいと考えています。

現代問題を扱ったこれまでの研修会については、昨年後半は開催できませんでした。が、今年は、日程は未定ですが、開催して参りますのでご参加をお願いいたします。



玉佛寺禅堂



大相国寺友好記念碑の前で



釋心廣住職と本山に寄進される梵鐘



上海万博見学



玉佛寺覺群会館



玉佛寺内覺群会館



玉佛寺禅堂内経行

慈照寺総合落慶

平成二十二年十月十六日

撮影／柴田明蘭

(本山だより60ページ参照)



江上総長挨拶



慈照寺華務佐野珠貴氏 献花



香道志野流家元蜂谷玄宗匠 献香



新築された研修道場





「商家に押し入った強盗団」



「貴人の婚礼」



Ōkyo Maruyama

重要文化財

七難七福図巻

円山応挙筆(江戸)

昨年の九月十八日から十二月十二日までの間、承天閣美術館に於いて、円山応挙筆になる七難七福図巻を特別展示させていただいた。この間一人を越える来館者があり大いに賑わった。

本作は応挙が近江の円満院(滋賀県大津市)の祐常門主の依頼によって描いた全長十五メートル全三巻に及び大絵巻。明和五年(一七六八)応挙二十六才の作。

世の中の様々な「難」(天災・人災)と「福」を真に迫るように描いている。七難は、『法華経・普門品(ふもんほん)』に「王経(わおうきやう)の中にでてくる火難・水難・怨賊難等、七種の災難をいう。地震や風水害、突然の天変地異は、この世の全てを押し流してしまう。火事はあるという間に、何もかも焼き尽くす。なすすべも無く

逃げ惑う人々。商家に強盗団が押し入り、一家が惨殺される。罪を犯せば斬首、磔刑、獄門の刑に処される。仏を念じ、仏を信すれば、仏法の力でこれらの災難から逃れられ、また罪を犯すことなく真面目に暮らせる」と経に説く。

祐常門主は世人に、難から救われるためには仏教に帰依すべしと。地獄極楽と仏典に説かれるが、実際に行ってみて、体験して帰ってきた人はいない。ならばこの世で現実起こる事柄を絵にして、人々に「諸悪莫作、衆善奉行(むい)ことをするな、善い事を行え」と教えようとしたのであろう。しかし「難」の図のほとんどが農民・町民が対象とされている事に対し、「福」は反対に貴人の婚礼、花見、舟遊び等が中心に描かれている。おおよそ庶民には程遠い「福」である。祐常門主は関白二条家の子息。母は霊元天皇の内親王。一般からすれば雲上人。やはり庶民のささやかな「福」とは縁遠かったのか。否、善根功德を積む事により、来世は幸せな生活ができる、と説いたのであろう。

解説／承天閣美術館事務局長 鈴木景雲

●次期展示予告

「重要文化財」伊藤若冲筆 鹿苑寺大書院障壁画
修理完成記念特別展示 五十面一挙に大公開

期間 平成二十三年三月十九日(土)～五月八日(日)



「濁流に人も家ものまれる」



「町を焼き尽くす大火」

とわ
永遠の安らぎ —石のカウンセラー—

株式会社 石 杖 都 みやこ



代表 坪田 忠男

年中無休 営業時間/AM8:30~PM6:00 (日曜日PM5:00まで)

本 社：〒603-8103 京都市北区小山北玄以町 24 番地 ヨクソ ヨイシ
(上賀茂橋西詰バス停前) 電話(075)491-4114(代)

工 場：京都市北区上賀茂神山 389 番 24 ヨクソ ヨイシ
(洛北病院バス停前) 電話(075)702-2440

夜 間：京都市左京区岩倉南池田町 117 電話(075)702-8814

御一報次第、遠近を問わず参上いたします。



撮影◎大應寺住職 久山弘祐
(上海玉佛寺大雄寶殿前)